

だい か
第3課
はし
『走れメロス』

だざいおさむ
太宰治

【読みましょう】

メロスは怒った。必ず、あの王をやめさせなければならない。メロスには政治がわからない。メ

ロスは、村の羊飼いだ。しかし、いいことと悪いことは、だれよりもわかって いる。今朝、メロ

スは村を出 発 して、遠いシラクスの町にやって来た。メロスは 16 才の 妹 と二人暮らしだ。こ

の 妹 は、もうすぐ結婚する。だから、メロスは、結婚式の服や パーティーの食べ物などを買い

に町にやって来た。メロスには親友がいた。セリヌンティウスだ。今はシラクスの町で、石工を

している。その友に会いに行くつもりだ。長い 間会わなかったから、楽しみだ。メロスは、町の

様子が変わったと思った。メロスは道で会ったおじいさんに質問した。おじいさんは、まわりを気に

しながら小さな声で答えた。

「①王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すんだ。」

「みんなが悪い 心 を持っているからだと言うのですが、そうではありません。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の 妹 さまのご主人を。それから、王様のお子さまを。それから、

日の出(HINODE) Language Center

か 妹 さまを。それから、妹 さまのお子さまを。それから、奥さまを。それから、部下を。」

「おどろいた。王様は 頭 がおかしくなったのか。」

「いいえ、そうではありません。人を信じることができないと言うのです。最近、少し派手な

暮らしをしている者には、人質をひとりずつ出すことを命令しています。命令を聞かないと、殺さ

れます。きょうは、6人殺されました。」聞いて、メロスは怒った。

「ばかな王だ。殺すしかない。」

二.

メロスは買い物で背負ったまま、王の城に入って行った。すぐに彼は、部下に捕まえられた。そ

してメロスは王の前に引き出された。

「何をするつもりだったか。言え!」ディオニス王は聞いた。

「町を王様から助けるのだ。」とメロスは答えた。日の出

「おまえがか?」王は、笑った。

「おまえには、私の孤独がわからない。」

「言うな!」とメロスは、怒って反論した。「人の心を疑うのは、一番恥ずかしいことだ。王は、

国民の心まで疑っていらっしゃる。」

「疑うことを私に教えてくれたのは、国民のおまえたちだ。人の心は、信用できない。人間

は、欲のかたまりだ。信じてはいけない。」王は静かに話し、ため息をついた。

071-9096 125

Madhawa Edirisinghe BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka
Dulanjalee Ramanayake BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

ひ で 日の出(HINODE) Language Center

わたし へいわ きぼう
「私 も、平和を希望しているのだが・・・。」

へいわ じぶん まも つみ ひと ころ なに へいわ
「なんのための平和だ。自分を守るためか。罪のない人を殺して、何が平和だ。」 「だまれ。」

おう かお い くち い わたし ひと ころ
王は、さっと顔をあげて言った。「口では、どんなきれいなことでも言える。私 には、人の 心

なか み し な あやま き
の中が見える。おまえも死にそうになれば、泣いて 謝 るだろう。でも、聞かないぞ」「ああ、そ

おも わたし し たす けつ い
う思っていればいい。私 は、ちゃんと死ぬつもりでいる。助けてほしいなど決して言わない。し

い じぶん あし み わたし みっかん
かし、——」と言って、メロス自分の足もとを見た。「しかし、私 に三日間だけください。

ひとり いもうと けっこん わたし むら いもうと けっこんしき かなら かえ
たった一人の 妹 を結婚させてやりたいのです。私 は村で 妹 に結婚式をさせ、必 ずここへ帰

き
って来ます。」

おう わら ひっし い
「ばかな。」と王は笑った。メロスは必死で言った。

わたし やくそく まも いもうと わたし かえ ま まち
「私 は約束を守ります。妹 が、私 の帰りを待っているんだ。この町にセリヌンティウスとい

しんゆう わたし しん くれ ひとぢち お い みっかめ
う親友がいます。そんなに 私 を信じられないなら、彼を人質としてここに置いて行こう。三日目

よる わたし かえ こ ゆうじん ころ
の夜までに 私 がここに帰って来なかったら、あの友人を殺してください。」

き おう わら かえ こ き じゆう
それを聞いて王は、そっと笑った。帰って来ないに決まっている。自由にしてやるのもおもしろい。

しんゆう みっかめ ころ ひと しん わたし かな
そして、その親友を、三日目に殺してやるのもいい。人は、これだから信じられないと、私 は悲

かお おとこ ころ
しい顔をしてその 男 を殺してやるのだ。

きぼう き ひとぢち よ おく しんゆう ころ
「おまえの希望を聞いた。その人質を呼びなさい。遅れたら、その親友をきつと殺すぞ。②ちょ

おく き つみ えいえん ゆる
っと遅れて来たらいい。おまえの罪は、永遠に許してやろう。」

071 - 9096 125

Madhawa Edirisinghe BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

Dulanjalee Ramanayake BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

ひ で 日の出(HINODE) Language Center

なに なに
「何、何をおっしゃる。」

じぶん いのち だいじ おく こ ころ
「ははは。自分の 命 が大事だったら、遅れて来い。おまえの 心 は、わかっているぞ。」 メロス

なに い
はくやしかった。何も言いたくなくなった。

しんゆう しんや おう しろ つ とも はな
親友セリヌンティウスは、深夜、王の城に連れてこられた。メロスは、友にすべてを話した。セ

なに い つよ だ ゆう とも あいだ
リヌンティウスは何も言わずにうなずき、メロスを強く抱きしめた。友と友の 間 は、それでよか

しゅっぱつ
った。メロスは、すぐに出 発した。

三.

よる ね はし はし むら つ つぎ ひ ごぜん
メロスはその夜、ぜんぜん寝ないで、走って、走って、村へ着いたのは、次の日の午前だった。

いもうと あに つか すがた み おどろ あに しつもん
妹 は兄の疲れた 姿 を見て 驚 いた。そして、兄に質問した。

むり わら まち ようじ のこ き まち い
「なんでもない。」メロスは無理に笑おうとした。「町に用事を残して来た。またすぐ町に行か

あした けっこんしき はや いもうと かお あか
なければならない。明日、おまえの結 婚 式をしよう。早いほうがいいだろう。」 妹 は顔を赤く

した。

ふく か き むら ひと けっこんしき あした し こ
「きれいな服も買って来た。さあ、村の人たちに結 婚 式は明日だと知らせて来い。」メロスは、

いえ かえ けっこんしき じゅんぴ ゆか たお ふか ね
家へ帰って結 婚 式の準備をして、床に倒れて、深く寝てしまった。

め さ よる お はなむこ いえ い けっこんしき あした
目が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家に行った。そうして、結 婚 式を明日に

ねが はなむこ い あさ はな あ
してくれとお願いした。花婿がなかなかいいと言わなかったので、朝まで話し合った。やっと

はなむこ せつとく けっこんしき ひる おこな けっこんしき お くら くも で あめ ふ
花婿を説得し、結 婚 式は、昼に 行 われた。結 婚 式が終わったとき、黒い雲が出てきて雨が降り

071 – 9096 125

Madhawa Edirisinghe BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

Dulanjalee Ramanayake BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

日の出(HINODE) Language Center

だ おおあめ むらびと なに かん たの
出し、ついに大雨になった。村人たちは、何かよくないことを感じたが、それでも、みんなは楽

うた いもうと しあわ よろこ おう やくそく わす
しく歌をうたった。メロスも、妹の幸せを喜び、王との約束を忘れていた。パーティーは、

よる はい いっしょう おも ひと
夜に入ってもっとにぎやかになった。メロスは、一生このままここにいたいと思った。この人た

たの くら おも いま じぶん からだ じぶん
ちとずっと楽しく暮したいと思ったが、今は、③自分の体は、自分のものではない。メロスは、

ね しゅっぱつ かんが ころ あめ こぶ
ちょっと寝て、それからすぐに出発しようと考えた。その頃には、雨も小降りになっているだ

いもうと わたし つか ね め さ まち
ろう。妹に「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちょっと寝る。目が覚めたら、すぐに町

で わたし おっと けつ さび
に出かける。私がいなくても、おまえにはやさしい夫がいるのだから、決して寂しいことはな

あに いちばんきら ひと うたが うそ あに えら おとこ
い。おまえの兄の一番嫌いなことは、人を疑うことと、嘘をつくことだ。おまえの兄は偉い男

ほこ も い はなよめ
なのだから、おまえもその誇りを持っている。」と言った。花嫁はうなずいた。メロスは、それか

はなむこ かた わたし いえ たから いもうと ひつじ ほか なに ぜんぶ
ら花婿の肩をたたいて、「私の家の宝は、妹と羊だけだ。他には何もない。全部おまえに

ひと おとうと ほご おも はなむこ わら
あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇りに思ってくれ。」花婿はうれしそうに笑

わら むらびと ぬ だ し ふか
った。メロスは笑って村人たちにもあいさつして、パーティーから抜け出し、死んだように深く

ね
寝た。

四.

め さ つぎ ひ そうちょう しゅっぱつ やくそく じかん ま あ
目が覚めたのは次の日の早朝だった。これからすぐに出発すれば、約束の時間に間に合う。あ

おう ひと しん み わら ころ あめ
の王に、人を信じるとはどういうことか見せてやろう。そうして笑いながら殺されてやる。雨も、

こぶ あめ なか はし わたし こんばんころ ころ
小降りになっているようだ。メロスは、雨の中を走りだした。私は、今晚殺される。殺されるた

071 - 9096 125

Madhawa Edirisinghe BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

Dulanjalee Ramanayake BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

ひ で 目の出(HINODE) Language Center

はし しんゆう たす はし おう わる ころ こわ はし はし
めに走るのだ。親友を助けるために走るのだ。王の悪い 心 を壊すため走るのだ。走らなければ

わたし わか なんと た ど
ならない。さようなら、私 のふるさと。若いメロスは、つらかった。何度か、立ち止まりそうに

おおごえ だ じぶん はし となり むら つ
なった。えいと大声を出して自分をしかりながら走った。隣 の村に着いたころには、もうふるさ

き も
とへの気持ちはなかった。

す うた うた ある とき あし と おおあめ かわ みず ふ
好きな歌を歌いながら歩いていた時、メロスの足が止まった。きのうの大雨で川の水が増えて、

はし こわ おおごえ よ
橋が壊れていた。メロスは、どうしていいかわからず、大声でだれかを呼んでみたが、船は

ぜんぶなが かわ うみ おおごえ な かみさま ねが
全部流されてしまっていた。川は海のようにになっている。メロスは大声で泣きながら神様に願っ

かわ なが しず とき す い たいよう しず
た。「ああ、川の流れを静かにしてください! 時は過ぎて行きます。太陽が沈んでしまうまえに、

おう しろ つ しんゆう わたし し
王の城に着くことができなかつたら、親友が 私 のために死ぬんです。」

かわ ねが わら つよ なが とき びょう びょうき い
川は、メロスの願いを笑うように、ますます強く流れた。そうして時は、1 秒 1秒消えて行く。

けっしん およ ほか ほうほう かわ こ ひやくひき へび なみ
メロスは決心した。泳ぐしか他に方法がない。メロスは、川に飛び込み、百 匹 の蛇のような波

たたか かわ む はし だ
と 戦 った。そして、ついに川の向こうにわたることができた。メロスは、 すぐにまた走り出した。

やま のぼ とき とつぜん め まえ さんぞく で ま
山を登り、ほっとした時、突然、目の前に山賊の グループが出てきた。「待て。」

なに わたし たいよう しず まえ おう しろ い はな
「何をするんだ。私 は太陽が沈む前に王の城へ行かなければならない。放してくれ。」

はな も ぜんぶお い わたし いのち ほか なに
「いいや、放さない。持ちものを全部置いて行け。」 「私 には 命 の他には何もない。その、た

ひと いのち おう
った一つの 命 も、これから王にあげるの だ。」

ひ で 日の出(HINODE) Language Center

いのち ほ
「その 命 が欲しいのだ。」

さんぞく ぼう なぐ さんぞく ひとり ぼう と ほか
山賊たちは、メロスを棒で殴ろうとした。メロスは、山賊の一人から、その棒を取って、他の

さんぞくさんになぐ はし やま お
山賊三人を殴り、さっさと走って山を下りた。

五.

あつ たいよう ひかり つか なんと たお き も つよ
暑い太陽の 光 と疲れで、メロスは何度も倒れそうになった。これではいけない、と気持ちを強く

も ふた み ほ たお た
持って、二、三歩あるいたが、ついに、がくりと倒れてしまった。立ちあがることができないのだ。

そら み な だ かわ およ わた さんぞく さんにな たお き いま
空を見て、泣き出した。ああ、川を泳いで渡り、山賊を三人も倒し、ここまで来たメロスよ。今、

つか うご あい とも しん ころ
ここで、疲れて動けなくなるとはどういうことだ。愛する友は、おまえを信じたせいで、殺され

なければならない。

からだ つか ころ よわ よわ き も ころ なか うき
体 が疲れると、 心 も弱くなる。もう、どうでもいいという、弱い気持ちが、 心 の中に浮かん

わたし どりよく やくそく やぶ ころ すこ うご
でくる。私 は、こんなに努力したのだ。約束を破る 心 は、少しもなかった。動けなくなるまで

はし き わたし うそ きみ わたし
走って来たのだ。私 は嘘つきではない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつも 私

しん わたし きみ うそ わたし ほんとう とも いちど うたが
を信じた。私 も君に、嘘をつかなかった。私 たちは、本当にいい友だったのだ。一度も、疑

いま きみ わたし しん ま おう わたし おく こ
ったことはなかった。今も、君は 私 を信じて待っているだろう。王は 私 に、ちょっと遅れて来

い おく とも ころ わたし たす やくそく わたし おう きら
い、と言った。遅れたら、友だちを殺して、私 を助けてくれると約束した。私 は王が嫌いだ。

いま わたし おう い うらぎ もの わたし おく い おう わたし わら
けれども、今、私 は王の言うとおりの裏切り者だ。私 は、遅れて行くだろう。王は、私 を笑

わたし ゆる わたし し わたし
い、そして私 を許すだろう。そうなったら、私 は、死ぬよりつらい。セリヌンティウスよ、私

071 – 9096 125

Madhawa Edirisinghe BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

Dulanjalee Ramanayake BA (Special) Languages Sabaragamuwa University of Sri Lanka

ひ で 日の出(HINODE) Language Center

し きみ いっしょ し きみ わたし しん わるもの
も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるはずだ。ああ、それなら、悪者

い つづ せいぎ あい かんが ひと ころ じぶん い
として生き続けようか。正義だ、愛だと、考えることはばかみたいだ。人を殺して自分が生きる。

にんげん せかい わたし わる にんげん
それが人間の世界ではない。か。私は、悪い人間だ。どうなってもいい。・・・メロスはその

ね
まま寝てしまった。

みず なが おと あたま おと き お あ み
すると、どこからか水の流れる音が聞えた。そっと頭あげて、その音を聞いた。起き上がって見

いし あいだ みず で みず ひとくちの いき で ゆめ さ
ると、岩の間から水が出ている。メロスは水を一口飲んだ。ほうとため息が出て、夢から覚めた

き ある い からだ つか と ちい きぼう じぶん ころ
ような気がした。歩ける。行こう。体の疲れが取れて、小さな希望がうまれた。自分を殺して、

ほこ まも きぼう たいよう あか ひかり こ は うつ よる じかん わたし
誇りを守る希望だ。太陽は赤い光を木の葉に映している。夜までには、まだ時間がある。私を

ま ひと わたし しん わたし いのち もんだい わたし しんらい
待っている人がいるのだ。私は信じられている。私の命など問題ではない。私はその信頼に

いま はし
こたえなければならない。今はそのことだけだ。走れ!メロス。

六.

くろ かぜ はし すこ しず たいよう じゅうばい はや はし いそ
メロスは黒い風のように走った。少しずつ沈んでいく太陽の十倍も早く走った。急げ、メロス。

おく いき に ど さんど くち ち で み むこ ちい
遅れてはいけない。息もできず、二度、三度、口から血が出た。見える。向うに小さくシラクス

まち み
の町が見える。

さま な こえ かぜ き
「ああ、メロス様。」泣くような声が、風といっしょに聞こえた。

だれ はし き
だれ「誰だ。」メロスは走りながら聞いた。

日の出(HINODE) Language Center

「フィロストラトスです。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子です。」その若い石工も、

メロスの後を走りながら言った。

「もう、だめです。むだです。走るのは、やめてください。もう、あの人を助けることはできません。

ん。今はあなたのお命が大事です。あの方は、あなたを信じていました。王様が、何を言っても、

メロスは来ます、とだけ答え、強い心を持ちつづけていました。」「だから、走るのだ。信じら

れているから走るのだ。間に合う、間に合わないは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。

④ 私は、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついて来い! フィロストラトス。」

最後の力を出して、メロスは走った。メロスの頭は、からっぽだ。何も考えていない。大きな

力に押されて走った。太陽は地平線に沈んで、今、最後の光が消える時、メロスは風のように

刑場に入った。間に合った。

七.

「私だ! 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる!」と、かすれた声

で一生懸命に叫びながら、ついにセリヌンティウスの両足に抱きついた。人々は、「すばらし

い。許せ。」と叫んだ。

ひ で 日の出(HINODE) Language Center

「セリヌンティウス。」メロスは涙を流して言った。「私を殴れ。力いっぱい私を殴れ。」

私は、途中で一度、悪い夢を見た。君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱き合う

する資格もないのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを理解し、うなずき、刑場全体に聞こえるほど大きな音を立ててメ

ロスの右頬を殴った。殴ってからやさしく笑い、「メロス、私を殴れ。同じくらい大きな音を

立てて私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、君を疑った。生れてはじめて君

を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱き合うことはできない。」メロスはセリ

ヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人は同時に言い、強く抱き合い、それから声をあげて泣いた。

人々は、大きな拍手をした。ディオニス王は、後から二人の姿を、見つめていたが、やがて静

かに二人に近づき、顔を赤くして、こう言った。

「おまえらの希望は叶ったぞ。おまえらは、私の心に勝ったのだ。人を信じることのすばらし

さを教えてくれた。どうか、私も仲間に入れてくれないか。どうか、私の願いを聞いて、仲間

の一人にしてほしい。」

人々から、大きな歓声が上がった。